

嵐山だより

―古典に学ぼう―

(公財)郷学研修所・
安岡正篤記念館評議員
高橋大輔

【第二回】

「志を立てる」ということ 三国志・諸葛亮孔明の言葉に学ぶ

■古典にみる、時の感覚

東洋古典に触れていると、思わず立ち止まってしまう言葉に出会うことがあります。

たとえば、『論語』の里仁篇には「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」という一節があります。「朝、人として行つべき正しい道理や真理を悟ることができたなら、その日の夕方に命が終わっても悔いはない」という意味ですが、二千年以上も前、古代中国の人たちは飢えや疫病、戦などの問題があとを絶たず、その平均寿命はわずか四十歳ほどであったといわれています。

す。

また、日本でも平安時代の『古今和歌集』に「梓弓 春立ちしより 年月の 射るがごとくも 思ほゆるかな」という歌が収められており、命には限りがあるということを感じさせます。だからこそ、その時間を大切に使わなければなりません。このような感覚は現代に生きる私たちよりも、先人たちのほうがはるかに鋭かったことがうかがえます。

■『三国志』の代表的人物・諸葛亮孔明

一九八五年（昭和六十年）に刊行された『男子志を立つべし…三国志』（安岡正篤ほか著、



プレジデント社刊）は、古代中国における魏・蜀・呉、三国の群雄割拠を描いた『三国志』を題材に安岡が行った講義録をまとめたものです。戦乱の世での「人間とは何か」「人はどう生きるべきか」という、たいへん重い問いを読者に投げかけています。

同書の中で安岡は、まず「歴史を学ぶ意味」について説いています。歴史は単なる昔話ではなく、人間のあり方や、国の盛衰の理由を教えてください。とくに『三国志』は、人の才能や性格、努力や判断によって、世の中がどう動くかがよく分かる書物だといえます。だからこそ歴史を学ぶときは、「自分ならどうするか」「どう生きるべきか」を考えながら読むことが大切だと教えています。

その中で、安岡がとりわけ高く評価している

人物が、『三国志』を代表する人物の一人、諸葛

亮・字は孔明です。その才覚は「赤壁の戦い」

における知略がよく知られていますが、南方を

平定した際には、敵将を何度も解放し、その心

を掴み従わせるという方法を採用しました。そこ

には、力で押さえるのではなく、「人を生かす」

という姿勢がよく表れています。



「孔明像」

出典：ColBase

(<https://colbase.nich.go.jp/>)

この偉大な軍師の本当にすぐれたところは、

「人を生かす力」にあったといえます。どれほど

頭が良くても、自分の力をひけらかしたり、人

を押さえつけたりするようでは、周りの人はつ

いていけません。孔明は自分の才能をむやみに

誇ることなく、むしろそれを抑え、相手を立て

ながら人の力を引き出していきました。だから

こそ、多くの人が心から従い、国を支えること

ができたのです。

■安岡正篤がとらえた、孔明の本質

安岡正篤が注目した孔明の人物像ですが、き

わめて公平で、かつ私心のない人柄であったと

されます。自分の利益ではなく、国のため、人々

のために尽くす。その姿勢が、多くの人の信頼

を集めました。安岡は講義の中で、この「己を

去つて公に尽くす心」こそが、人物の大きさを

決めるのだと説いています。

さらに安岡は、その生き方を通して「志を立て

ること」の大切さに注目しています。志とは、

ただの願いや夢ではありません。うまくいくと

きも、うまくいかないときも、自分を支え続け

る「心の軸」です。孔明は若いころから天下の

行く末を考え、自分の役割を見定め、そしてそ

の志を最期まで貫きました。たとえ志半ばで倒

れたとしても、その生き方は後の人々に大きな

影響を与え続けています。

このような孔明の生き方の中で、数多く残さ

れている言葉の中から有名なひとつに注目して

みたいと思います。

鞠躬尽瘁 死而后已

これは、戦の場にあつて孔明が自らの決意と

して示した言葉で、「身をかがめて力の限り尽く

し、死ぬまでやり抜く」という意味です。自分

の役目を最期まで果たそうとする強い決意が表

れています。ただ難しい漢文として覚えるの

ではなく、一字一字をたどりながら、「何に力を

尽くすのか」「どんな志を持つのか」を自分に置

き換え、書く際には半紙に問いかけてみてほし

いのです。

歴史に学び、人物に学び、そして「これだ」

と思つた言葉を書いてみる。その積み重ねの中

で、自分の志も少しずつ形になっていくのでは

ないでしょうか。諸葛亮孔明のこの言葉もぜひ

一度、筆を走らせてみていただければと思いま

す。そこから新しい気づきが生まれるかもしれ

ません。